高村壽一著「響き合うコラム」草場書房 2009 年 4 月 20 日刊を読む

書く文化の復活

1.「言葉は人間存在の証し、言葉こそが人間である。そこに錘鉛を下ろして、このあたりでじっくりと、ワープロやパソコン、ひいては情報化社会の限界を見極める必要がある。」
　書についてユニークな評論を発表し続ける石川九楊さんの記述(『「書く」ということ』)である。歴史と文明は文字の運動であり、文字は人間の肉声だ、と言い、「ペンを執れ」と叫んでいる。

2. 文字の文明史を振り返れば、無文字→金石文字→肉筆→印刷文字→電子文字、というふうに展開している。ユビキタス社会に突入している今日、電子文字の活用によって「書く文化」はやや後退の兆しをみせている。

3. 学生はシャープペンシルやボールペンでノートにメモし、授業のキーワードは携帯電子辞書で直ちに確認する。教師のほうは、その結果については議論があるにせよパワーポイントの使用が最も「進んでいる」とされている。ひと昔前では考えられない授業空間である。

4. 教師―学生の事務上の伝達ばかりでなく、講義の計画内容(シラバス)、各授業の予習や質疑、レポート提出も電子メールで処理する教師もあり、半ば通信教育化する方向にあるといえる。ここでは、伝統的な読み書きの教育は消滅している。

5.「書く」という文化の消滅は、実に貧相な情景を現出する。若い大学の教師の板書を見て、唖然とすることがある。正しく、明らかでなく、整然としていない場面にしばしば出くわすことがある。筆順など間違いだらけである。学生に示しがつかない。

6. 魚住和晃氏の『現代筆跡学序論』にある神戸大学生対象調査によると、学生の漢字の筆順の間違いには、目を覆うものがある。「九」「有」「非」「右」「成」「馬」の筆順正解は 50 %台だった。いずれも第一画は「上から下」(縦)が大原則である。

7. 筆順などこだわらない。文字は記号だから結果オーライだ、という意見もあろう。電子文字の日常化がそう言わせる。手書きは煩わしいという空気が支配的になる。漫画愛好家の首相は漢字の読みをしばしば間違える。

８．手書きを厭うと、漢字の象形からの形成を無視することになる。草書の筆脈とは関係ないということになってしまう。文字、言葉は人間の証しではなくなってしまう。現代社会は効率化を求めるあまり、人間の遺産を簡単に放棄してしまうことにならないか。それは軽率、いや傲慢な所作ではないだろうか。

９．文字のない文化は継承されにくい、というのは人類史の事実である。それは承知でも、自分の中指のペンだこが消えていく。

10．しかし、辺りを見回すと、電子機器依存の行き過ぎに気づき、人間の肉声である書き文字を尊重する動きもみられる。レポートは自筆による作成にし、試験の回答を○×方式ではなく記述にする例も増えてきた。採点には手間がかかるが、記述式のほうが正しい評価ができるという教師もいる。

11. パワーポイントから板書に戻ったある大学教授は「教室の集中力は書くことによって高まる」と言い、学生は「先生のチョークがポキッと折れたところが試験に出る」と受け止める。そこには、人間的な「教授」という文字が表す緊張空間がある。

12．そういえば、大学を卒業する学生が残した記念の色紙には、普段使うボールペンやサインペンではなく、万年筆による感謝の言葉が楷書で記されていた。大切に保存し、時折取り出して見入る。

P31 ～ 33

［コメント］

日本経済新聞の一面コラム「秋春」の執筆者であった高村さんならではの「書く文化」の復活論として私も全面的に賛成する内容だ。「書き取り練習」は、どんな時代でも人間の知的な生活の上で欠くことができないと考える。

－ 2009 年 3 月 29 日林明夫記－